

The Gallery voice

NO-29

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2007.03.17

失われつつあるもの

上間 彩花

およそ八年前。私が東京での学生のころ、久しぶりに沖縄に帰郷したときのことで。地元、北谷町のハンビーの、まだ整理されていない海辺に散歩に行ったときのことで。どんよりと重たい雲の下に、大きなクレーンを乗せた巨大な船が、水平線を覆うように浮いていました。あまりにも船は大きすぎて、これから何が起こるのだろうと思ひ、その変化の前ぶれを、当時いつも持ち歩いていて一眼レフカメラで、その様子を写しました。そのころは沖縄を離れていたのだから、沖縄の変化の早さに敏感であったと思います。

あれから沖縄に帰郷して、五年の月日が経ちました。東京で絵を描く中で、絵を見てくれた人に「沖縄の色が出ている」と言われて、その一言が、ずっと焼きついて離れませんでした。確かに私は沖縄に生まれたけれど、肝心の私の中には、中身の無い空洞の沖縄が、横たわっていました。東京では、離れているけれど、沖縄の文化や、沖縄のことを表現した文学などを読みあさったり、仲間と沖縄について語ったり、ピースアート展を路上でして、絵や、ピースのロゴを描いた缶バッジなどを作って、行きかう人とコミュニケーションをとり、平和を少しでも広げていけたらと、動いていました。でも、何か遠い沖縄でした。いくら沖縄のことを多く語り、東京から沖縄の平和を発信することなど、私に無理が生じてきたのです。ならば、沖縄に帰って、実際に生活してみようと思ひ立って見たのです。

実際に生活すると、真っ先に沖縄の自然の色彩と、その力強さに圧倒されて、何を描けばいいのか、見えなくなるほどでした。絶望しながら、沖縄の芸能である琉球舞踊に、心を奪われました。心が振るえました。沖縄の自然のエッセンスを凝縮したような、目も覚めるほどの鮮やかな色彩の世界がそこにはありました。衣装の色もひとつひとつが鮮明で洗練された色。しかしそれは、反発しあうことなく、まわりと溶け込み、調和していたのです。先人の素晴らしさを感じるとともに、沖縄という土地から、このような色彩文化が生まれてきたということに、この土地のもつエネルギーの凄さを感じたのです。

沖縄での生活は、立ち止まると、つねに何かを投げかけてきます。立ち止まって、心を静かにすると、あまりにも早い、身の回りの風景の変化があることに気づくのです。変りつつある沖縄の風

景。匂いのある風景、幼い頃の記憶が立ち現れるような風景は、もはや少なくなりつつあるようです。

風景はおそらく、それぞれの人の中に、幼い頃の記憶や思い出として、自分を形作ってきた要素でもある、大切なものとして、その形はけして消えることはないでしょう。ときに風景は環境としてとらえると、その環境が変わることによって、広く言えば、人と自然との関わり方や、人と人との付き合い方であるコミュニケーションまでも、変えていくのだと思います。その変りゆく沖縄の風景、様々な感性を与え、文化を育てた地は、変化を止めません。その繊細な問題は、複雑に現実と絡む一方で、けして消えない危機感となって、日に日に増していくようです。



「記憶が匂い立つ瞬間」

ミクストメディア

現在、私の興味の方は、身近な町や、急速に発展をとげる東シナ海を望む海岸を歩き、その場所のなくなりつつあるもの、また新たに人工的に作られていくものを、紙にフロッタージュ（写しだす）して、その異質な素材をコラージュ（紙を張り合わせる手法）することです。

沖縄。なぜか気になる存在。沖縄で生活するうえで、沖縄独特のコミュニケーションも感じ、人との出会いによって、影響を受け、さまざまなことを感じ、絵を創作するにあたって、問題意識が見えてきたところです。その日々感じている沖縄での生活の中で、制作する途中にいるところです。（うえま あやか）

貼られた皮膚、剥がされた皮膚

新垣 誠

乱拍子の鼓動、荒々しい息づかいが聞こえる。何だ、この血なまぐさい匂いは。このガラスケースは外れないのか。それに触ることはできないのか。何だ、この変な動悸は。腹の奥に鉛のような鈍さを持って何か疼く。生か死かと迫るクレパスの深淵を目の前に途方に暮れ、足下が竦む。自分の脈が聞こえる。何だ、このあまりにも親密な居心地の悪さは。

そう、それはこの島に漂う妖気。懐かしいメランコリー。テトラポットの海岸線。砂の上で朽ちる骨。伊波普猷が憂いた島の未来。その時間からにじみ出る絶望は、いつしか琥珀となり、それは時として美しくも見えた。百重なす荒波はいつしか魂を浸食し、神経を麻痺させてきた。しかし、彩花は吐血を続ける。その血はまだ濡れている。ノルデの炎のような赤血球が動きひしめく。生臭い有精卵の滑り。そこに打ち込まれる鉛玉。無機質なパイプが急激に体温を奪っていく。遠ざかる意識のなかで繰り返される祈りの儀式。朽ち果てデカダントに黒ずむ有機体。

赤く腫れた手。刻まれた肉。剥がされた皮膚。貼られる皮膚。彩花はコラーゲンが好きだと言った。皮膚を剥いで、貼り重ねていくうちに、それはボディアートの様を呈す。作品のなかで腫上がり滲み出る赤は、彩花の魂というよりは、身体そのものだ。自己の奥底へと向かい掘り下げていくエネルギーは、どん底で打ち砕け、その飛び散った断片が次々と貼り重ねられていく。

1972年以来、急速に変わってきたこの島の風景。噛み切られた母の舌（マザータング）。「サツルバスイ?」、山之口獺の問いが聞こえる。脈は弱まり、血は滲み続ける。そして、止まらぬ咳と吐血。彩花は、その血餅を漆喰に、皮膚を貼る。そして、同時に貼られていくのは、身震いするような鈍い機械音でもある。しかし、知らず知らずのうちに、その機械は私たちの身体を模倣しながら、その一部と化していく。そこにあるのは、死へと続く生なのか。それとも生へとつながる死なのか。

最近、生まれ育った首里に帰るのが怖い。大型観光バスが通るようになると、拡張工事が進んでいるその場所は、もう自分の育った街ではない。なにも変化を望まないのではない。この置き去りにされた感覚が嫌なのだ。アルコールを注がれたかのように、ひりひりと傷口にしみるのだ。何か大切な物が奪われていくような感覚。肌が剥がされるような感覚。

果たして彩花が必死に抱き寄せようとしているものは、その大切な物なのか。

ビギンが「島人の宝」を歌ったとき、あれは敗北宣言だったのだろうか。その大切な物はきっとあるはずなんだが、もう失われてしまって、見ることも触れることもできないのだろうか。そしてそれは、いつかは永遠に失われてしまうものなのだろうか。世界中で失われていく愛しいもの。あの懐かしい温もり。キュンと胸が締め付けられ、涙がでてくるその大切な物。

時間の糸を逆には巻けないように、その驀進する大きな流れを止めることは、誰にもできない気がする。しかし、一方でその無機質な塊は、大切な物への渇きを生む。そのコントラストは、いま不気味な光を放ち、圧倒的な力で目の前に迫り来る。内蔵に直接触れるような生々しさは、記憶を激しく揺さぶり起こす。例え目を背けたとしても、もうあの安眠には戻れない。



「回帰－記憶の深くに」 ミクストメディア

そして彩花は、皮膚を貼り続ける。滲み出る血の痛みを、まるで一々確かめるかのように。その身体から鱗を一枚ずつ剥がしては、重ねていく。生傷が口を開く。その赤が、目に焼き付いて離れない。焦げ付き鼻を突く黒の匂い。鉛のように重くなった頭をもたげ、もう一度、その絶望と向き合う決心をしよう。原初のエネルギーが、下っ腹をかき回す。もう一度、動かなければ。その赤が乾かぬうちに。

(沖縄キリスト教学院大学助教授／あらかき まこと)

曝されてある自己へ

新城 郁夫

失われつつある、まさにその過程を表象することは、はたして可能だろうか。あるいは、失われつつある、という変移そのものを、人は十全に感知しえるのだろうか。ことは、「つつある」という、現在進行形でしかありえない人間の生の変移のあり方に関わり、破壊されていく風景や世界の消滅のあり方そのものに関わる。失われつつある今を、色や形において捕らえようとする試みは、微分化された瞬間における事象の変移そのものを、色彩やフォルムという表現媒体において固定化しようとする、極めて困難な矛盾を抱え込むことになるだろう。流動的な様態でしか存在しえない風景や身体あるいは感情や感覚といった不定形なものたちを、郷愁や喪失感といった事後的に再構成される感情の形式とは根源的に異なる、残酷なまでに生々しい現在として生き、そして、その失われつつある現在をアートという形態において捉えることは、いかにして可能となるのだろうか。

「失われつつあるもの」というタイトルのもとに集められた、上間彩花の作品の現在は、まさにそうした不可能な試みに向けて、無防備なままに曝されてある。この無防備なまでの投げ出しにおいて、上間彩花は、果敢な挑戦を自己自身に向け、さらには、その自己を刺しつらぬき「自己ならざるもの」との遭遇へと自らを押しだそうとしている。その挑戦は、「沖縄の原風景」や「幼い頃の記憶」といった言葉で了解される懐かしい情緒とは異なる、自己と非自己とのせめぎ合いとして、痛ましく顕現しているのではないか。あるいは、こう言い換えられるかもしれない。衝突と接合あるいは離反と融合といった矛盾する運動として現れる、自己と非自己的なものとの遭遇という出来事のさなかに、仮に沖縄と名づけられるものの現在を発見しようとしているのが、上間彩花の作品なのだ、と。

たとえば、「呼吸する島」と名づけられた作品に向きあうとき、そこにどのような「島」が見えてくるだろうか。敢えて言うなら、そこに見出されてくる「島」は、まだ誰も見たことのない自己の身体という「島」とも言い得るのではないか。遠い島、浮き沈みしつつある島、揺れている島、衰弱しつつある心肺であえかに呼吸する島、そのようにも見えるこの「島」は、孢子と卵によって連結され、無限に増殖しつつ同時にその死を生きつつある「自己」という有限で有機的な生命体と見えてくるとも思われるのだ。少し視線をずらしつつ、作品の左上で蠢い

ている孢子の先端のような物体を見るとき、この物体は、私たちの身体内部に密かに住まう異物としてのウィルスのようにも見えてはこないか。ウィルスという異物を呑みこみ、この「非自己」という外部を「自己」の内部にくわえ込んでいく免疫システムによって、内部と外部の境界を常に書き換え、その事で「自己」を変成させていくのが私たちの身体であるとするなら、他ならぬ私たちの身体こそが「失われつつあるもの」と言うことも可能なように思える。上間彩花の作品が、いま啓こうとする地平に垣間見えてくるのは、この失われつつある不気味な自己の、記憶化されない記憶であり、自己ならざるものの侵入によって自己の変成を受け入れていくしかない、外部に曝されてある私たちの生のあり方なのだと、そのようにさえ言えるかもしれない。



「呼吸する島」 ミクストメディア

その意味で、失われつつある風景とその記憶を手ぐり寄せようとする上間の作品は、反転した自画像ともなっている。たとえば、「コラージュされた記憶」という作品が、やはりその左上の視野において、ある異物が捕食され呑み込まれていこうとする光景を写し取っているのは、記憶が自己に属するというより、こうした得体の知れない記憶たちに呑み込まれコラージュされて在るのが、「自己」という不確かな存在にほかならないことの顕れとも見うるだろう。くり返し言えば、上間彩花の作品は、こうした不確かな自己に対して無防備なまでに挑戦的な姿勢を取っている。だが、この無防備な姿勢において、彼女の作品は、異物に曝されてある自己に対してどこまでも率直であり、その率直さゆえに、「失われつつあるもの」としての危うい自己から逃げようとはしないのである。

(琉球大学・文学批評／しんじょう いくお)

学芸員からみた県立美術館

岡本亜紀

沖縄県立美術館の開館が迫っているが、様々な問題点疑問点が出されているのは周知のことと思う。今回、浦添市美術館（以下「浦美」と記述）の学芸員から県立美術館（以下「県美」と記述）に望むことについて書くようにという依頼を受けたので、美術館で働いている者の立場からいくつか述べてみたい。

県美は当初「沖縄県立現代美術館」としてスタートするはずであった。それが何かよくわけのわからない理由で「現代」が外されてしまった。たかだか言葉ひとつのことと考える向きもあるかもしれないが、館の名称はその館の姿勢を表明するだいな看板である。浦美の場合、漆芸のコレクションをもとに建設計画がスタートしたが、開館前の段階で「漆芸美術館」ではなく「工芸美術館」となり、更に美術全般の展示ができるようにとただの美術館となった。開館当時は絵画や彫刻などの美術展が開催できる場所が求められていたことから、ある程度しかたがないことだったかもしれない。しかし、近代ヨーロッパ絵画から浮世絵から様々な種類の展覧会を開催してきた結果、開館して16年たつにもかかわらず漆の美術館であるという認識があまり一般に定着せず、自分たちの活動の重点をどこに置くのか内部でも意見が分かれている状況である。

県外から作品を借りるような企画展の予算は、数百万から数千万円かかる。現在浦美の企画展予算は中小規模の自主企画が年1本程度しかなく（それすら削られつつある）、あとはお金をかけない小さな展示を行なっている。観覧者の多いお金のかかる大きな企画展はマスコミなど企業がお金を出して主催し、こちらは展示室を提供しての共催という場合がほとんどなのである。県美開館後はこうした一般向け展覧会は県美が中心となるだろうから、浦美としては今後収蔵品の特色を活かした活動に中心を移していく方針だが、その場合どうやって予算と来館者を確保していくかが大きな課題となっている。残念ながら今も収入や来館者数が外部からの館評価の大きな指針なのである。

県美の指定管理者がどこまで事業に関わるのか明確ではないが、管理者側は経営面で集客の見込める企画展を展開していこうとするだろう。学芸員が館の理念をどう管理者や一般に示し活動していけるかが問われることになるはずであるが、名称から「現代」が外されて

しまったことで、県美のそうした活動スタンスを伝えることがより難しくなることが懸念される。学芸員のぶれない姿勢を望むが、外部からも県美の理念を守るよう、根気よく学芸員に求めつつサポートしていく必要がある。



＜基本計画の「沖縄県立現代美術館」完成図＞

どこの館でもそうだが、建って年数がたつと予算がつかなくなる。浦美もここ何年も作品購入の予算はつかず寄贈に頼っている。また、空調機械が老朽化して温湿度の調整に苦勞しているが、取替えや修繕には莫大な予算が必要となるため、機械をだましだまし運転させているのが現状である。展示室の壁や床の補修など必要となってくる管理運営費はばかにならない。市直営の当館ですら電気代節約など運営努力を迫られているのに、指定管理者が関与した場合こうした経年劣化による「当然出てくる必要な経費」をきちんと確保できるか、という不安がある。管理者側は経費増というマイナスイメージを嫌がり、作品の保存管理や来館者への安全管理に関わる問題改善が先送りされかねない。これは杞憂かもしれないが、学芸員の声がかちんと予算に反映され、外部からもそれを監視できるシステムが必要となるだろう。博物館・美術館の協議会がその役割を担うことになるかもしれないが、そのためには責任ある人選と予算を含めた情報公開を外部からも声を上げて求めていかなければならない。

指定管理者の導入が避けられない今、観覧者や子供たちのため、沖縄の文化のために、県美の試行錯誤をより良い形の道筋をつける方向に持っていけるように、我々に何ができるかを考えたい。

（浦添市美術館学芸員／おかもと あき）

AYAKA UEMA



(アトリエの上間彩花／2007.1)

<上間 彩花 について>

上間彩花のアトリエを訪ねたとき、非常に驚かされたことがある。鳴り響くごう音。北谷町のアトリエのあるアパートの上空を米軍機が通りすぎてゆく。会話が成り立たないどころか、耳の痛みまで感じるほどだ。しかし私の驚きとは裏腹に、生まれも育ちも北谷の上間にはこれが「ふつう」だという。非日常の中の日常。身近に基地を感じない沖縄南部育ちの私にはとても奇異に映った。同世代、同じ沖縄に生まれ育ちながらこんなにも受け止め方が違うとは・・・しかしどんなに特別なことでも、長い年月をへて歴史を刻み日常生活の一部と化す。ゆっくり、でもしっかりと土地に根をはり馴染んでゆき、気がつけば堂々とそこにある。上間はそんな「特別」な地域空間で絵を描いていた。

上間彩花の表現に対する転機は、2000年に東南アジアを旅したときである。旅の途中、高熱を出し倒れ「このまま死ぬかもしれない」と思ったという。そのとき「まだ生きたい、生きて絵を描きたい」という強い思いがこみあげてきた。人は生と死のはざま、ギリギリのところを何を思うのか。その貴重な体験を通して見えたモノが上間の作品には共通して流れている。かつて、大学時代の上間は写真や舞踏、パフォーマンスなどを表現手段として作品を制作発表している。当時から上間の中にある「自分の内面をとらえる」作業は、現在の紙コラージュの表現方法に変えた今も確かに存在している。自己内面のより深みへ

と入り込み、その視野は広がりをもちはじめたように思う。上間の表現スタイルの紙コラージュという手法は、厚手の紙を支持体にドローイングし、その上に描写されたイメージの紙を切り貼り、何層にも重ねて画面を構成し、最後は絵の具で仕上げる。質感のちがう紙を何枚にも重ね、重ねては切り剥がし、剥がしてはまた貼りつけるという、一見すると子供が遊びながら何かわけのわからないものを作っているようだ。しかしそんな原始的ともいえる作業工程そのものが、上間自身の心の奥底から沸き上がる「生きる」という命題を表現するのに重要であり、上間にとって最も適した手段を獲得したかのようにみえる。都会生活の中で感じた人と人とのつながりとは何か？、生きる喜びとは？家庭内や学校、職場、地域社会、人と人の絆が希薄になり、冷たく暗いニュースの多い現在、上間の作品に人肌を感じるのはこんな社会状況にも困っているであろう。

故郷沖縄に帰ってきて5年。郷愁を感じるにはあまりにも変わってしまった沖縄の風景やとりまく状況。しかしそれでも、沖縄に帰り制作を始めて、あたらしい世界が見えてきたのだという。沖縄という場のもつエネルギー、パワーにあると彼女は言う。そして今企画展示会のタイトル「レッドデータブックー失われつつあるもの」は絶滅危機に瀕した動植物を紹介した書籍からヒントを得ている。最新作「コラージュされた風景」は特に興味深い。上間に見える故郷沖縄のレッドデータブック化したモノとは一体何なのか？それは自然界だけにとどまらず、我々が未だ気づいていない、失いつつあるモノ、もしくは失ってしまった内なる「何か」なのかもしれない。

大学在学中より創作発表を続ける上間は「第10回 ART BOX 大賞展」大賞受賞、「VOCA2004」展出品をはじめ、昨年につづく二年連続「沖展賞」受賞の快挙を成し遂げた。同世代の私自身、作家・上間彩花の活動から目が離せないと同時に、今後のますますの活躍に期待している一人である。

(画廊沖縄スタッフ／田原美野)